

南の島の養護学校

村松渚

(平成 20 年度 1 次隊 養護 フィジー)

海外に行きたいとか国際協力をしたいとか色々な思いがあると思うんですけど、私も自分の学んできた事が世界の人々のためになるのならという気持ちがありました。でも本当に自分の中で大きいのは 2 番目の方で、先生という仕事に小さいころからなりたくてすごくその仕事が好きなので、もっと魅力的な先生になって、自分が世界に出て見聞を広げて自分自身が豊かになる事で、さらに日本でよい意味で面白い教育ができるようになるんじゃないかという気持ちで私は協力隊に参加しました。

今日の発表内容はこんな感じになっています。まくしたてると思うんですけど分からない事があったらあとで聞いていただいて、せっくなのでいろんな風景とか話がしたいなと思って。

派遣前訓練は 4 月から始まると思うんですけど、65 日間の訓練があって長野県駒ヶ根市と福島県二本松というところでやります。これは国別とか話す言葉によって分かれていると思うんですけど私は長野県の方ですね、駒ヶ根訓練所というところで訓練を行いました。やることはここに書いてある通りでメインは語学なんですけど、他にも途上国の生活に必要な知識なども学びます。あとはあいている時間に自分達でグループを作って勉強し合ったりとかスポーツをしたりという活動もできます。ここで同じ国に行く仲間や同じ協力隊として高い志を持った仲間に出会える事が出来ました。

これがその様子です。これ英語のクラスですね。書道をやっているんですけどこれは日本語教育、隊員が英語で書道を教えるっていう模擬授業をした様子です。

これが生活班の仲間なんですけど、生活班の仲間はすごく仲良くなってみんなで誕生日を祝ったりだとかずっと生活を共にした仲間です。教員という仕事をやっているとしても普段接する人が教員が多いと思うんですけど、こういうところで教員以外のいろんな分野で活躍してる人に会ってすごく良い刺激を受けました。これが私がバレーボールが専門なものでバレーボールの練習をみんなですて最後にみんなで大会をやろうという事でやりました。

あとは課外活動というので、これは近所の農家に行ってこういう農業のお手伝いをしたりとか近所の高齢者施設に行ったりだとか、地域との交流もありました。

これは卒業式、修了式なんですけど、これは自慢なのですが最後の言葉を述べさせてもらって、これで仲間と一緒に 65 日間本当に学生のような青春の日々を送ったなど今では思っていますがどうですか高橋さん。

高橋さん：青春ですね、もう一回行きたいですね

先生：もう一回行きたいですね。では派遣先での活動についてです。私が行った国はフィジーという国です。場所なんですけどこれが日本です、これがフィジーです。この辺にトンガとかサモワとか南太平洋にある小さな島国がいっぱいあって、フィジーというのはその島国の中でも一番発展しているのではないかとされている国です。

基本情報は以下の通りなんですけど面白いのが、フィジーなのになぜかインド人がいるんですね、その理由は、イギリスの植民地だった時があって、フィジーっていうと沖縄のような気候をイメージしてもらえればいいと思うんですが、サトウキビの産業をやるために、フィジー人は南の国の人だからやはり働かなかったんですね。困ったイギリス人が同じイギリスの植民地であったインドからインド人を連れてきてという歴史があります。フィジー人としては自分たちの国にインド人が来て、インド人は比較的働くので経済的に豊かになっていって、やはりフィジー人とインド人、表面上は仲良くしているんですけどもその根深い確執というのはあるなと感じました。

任地についてなんですけど私はラオトカという町で首都に次ぐ 2 番目に大きな町にいました。基本情報はこんな感じです。

これが東京でいう銀座 4 丁目のような交差点なんですけど、こんな感じであと市場ですね、マーケットがあって野菜がありました。比較的大きな都市だという事もあってスーパーマーケットもあって日本と同じようなものが手に入りました。

ラグビーをしているのは大体フィジー人です。サッカーをしているのはインド人というのがあるんですけど、夕方になると大人が集まってきてグラウンドで運動をしたりとか、右側のところで、顔で分かるんですけどこれインド人の子どもたちなんですね、インド人の子どもたちが夕涼みをしたりとかしておりました。

配属先についてです。ラオトカ **school for special education** というラオトカ養護学校で生徒は 50 名ぐらい。日本では知的障害の学校、聴覚障害の学校と別れていると思うんですけどやはり養護学校の数が少ないという事があって、色々な障害者の子が通っている学校でした。年齢が 4 歳の幼稚部から 22 歳と書いてあるのですけれども、卒業というものがとくになかったんですね。私がいた時点で一番年上の子が 22 歳という事で、はっきりしたカリキュラムがないので、自然とモチベーションが落ちて学校に来なくなったら終わりというようなところがありました。これが学校の様子です。

これが子ども達で、この青いのは制服ですね。

これが生徒の様子でクラス 1, 2 の小さい子の感じで、(スライドを見ながら) これはフィジー人です、インド人です、先生はフィジー人です、見分け方はフィジー人は頭がアフロです、でこの子はインド人です、ちょっとストレートな髪の毛の感じでここで見分けます。子どもたちは結構仲良くやっています。彼女もインド人ですね、頭がアフロなのはフ

イジー人、簡単な見分け方です。

クラスは色々分かれているんですけども、すごく問題だなと思ったのは、クラス分けは先生たちの主観でやっていて、またその先生たちというのも一応、教育大学の特別支援教育を専攻していたというんですけども、やはり知識や技術は日本に比べるとあまりない所で、全然アセスメントが正確でない中で色々なレベルの子が一緒にいると、後ろに計算が書いてあるのですが、このクラスでこういう計算をやっているけどこのクラスの中でこういう計算ができる人は本当に一人二人とか、やはり生徒の実態と教育内容があっけない授業をしていました。

私の要請内容は年齢の高い女子生徒、知的な発達に富んだ女子生徒に対する家庭科、洋裁や料理や図工の指導という事で、学校側の意図としては年齢の高い生徒に手に職をつけるという教育をして、学校を卒業して経済的に安定させたいという内容でした。

びっくりしたのが、行ったら「日本から来たんだから何でもできるんだから」といわれて4人の女子生徒と教室を任せられ「いきなり担任をしろ」と初日にいわれたので、「それは無理なのでとりあえず1週間学校を見せてください」といって、1週間見学をしました。

カウンターパートという一緒に協力してくれる教員は一応いるんですけど、特にかまってもらえませんでした。日本人っていうのは結構知っているんですけど、評判も良くて、日本人という事に対しては優しくしてくれるんですけど、「何しに来たの」という感じで、日本で学校にそういう協力隊のような人が来るんだったら、いつからいつこういう期間でこういう事をしに来ますというのがあると思うんですけど、そういう情報共有が全然なかったの「何しに来たの」といわれながら最初の方は小さく、立場なく暮らしていました。

家庭科的な内容という事だったのですが、最初あったのはさびた針と糸が数本という中で、「何もないけどそこに生徒はいる。まずはできる事をやっつけよう」という気持ちで活動を始めました。学校側の意図としてはもっともな事をいっているの、自分が実際に生徒を見て彼女たちに必要なものは読み書き計算の力、自分が学校を卒業した時、自分が作ったものを売る時もやはりこういう力はあるだろうというので、基本的な学力を上げる事、というのと実際に製品を作る力かなというので、午前中は英語や数学などの基礎的な勉強をして、午後に物づくり的なプログラムをしました。

これが英語の様子でこんな感じでやっていました。数学は毎回簡単なテストをやっつけ、そうすると彼女達もわかるとか、できるとかという自信がついて、いい顔で授業を受けてくれるようになりました。では動画を。これは定規の使い方をやっているところで、私が黒板に8cmと7cmの四角を書いてくださいというので彼女はやっていたという感じですね、でも向こうの先生はこういう風に教えてくれないんですね。定規使えっていったらそれだけで具体的にどうやって使うとかこれが1でここから8まで引くんだよってという説明なくやっているの、彼女たちはちゃんと教えたならわかるのに実際は教えられていないという

のがありました。

これは耳が聞こえないんですけど掛け算九九を覚えていました。手話を使っているんですけど、カードがあつてこういう風に3×10はとかってやって自分で数えて30だつて答えをひっくり返して合つたという感じでやっていました。日本だったら何でもないカードを使った学習だと思うんですけど、彼女たちにとっては新鮮でモチベーション高く一生懸命勉強してくれました。

午後の物づくりでは図工で折り紙をやったり、書道をやったり、日本文化紹介的な事もやりました。

あと絵を書いてプロフィールを作ろうとあって、日本では何でもない事が彼女たちにとっては新鮮で、みんなそうすると他の生徒達も私のクラスに来たくなるんですよ。

午後の家庭科の授業はモノがないのがちょっと大きいんですけど、立場ない中でこれを買ってくれあれを買ってくれとはまだいえなかつたので、本当にない中であるものを使って簡単な針刺しを作ったりとか、きんちゃく袋を作ったりして、でも彼女たちはそれでも学んで、学ぶ姿勢は良くて自分で自分のお裁縫箱を作って、これを使ってこれからはもっと学んでいこうみたいな感じでやっていました。

後はこれは同じフィジーの隊員なんですけど、同じような活動をしている隊員と協力して、各滞在先に行ってワークショップのような事をやりました。やはり一人ではできない事も他の隊員が集まるとすごく勇気づけられるし、いろんなアイデアが出てとてもいい活動になったと思っています。

これは生徒の進路って書いてあるんですけど、日本の生徒が養護学校を卒業したあとどういう進路をたどるのかという事も現地の先生のお話をしたりしました。

フィジーの教育というのは先生が教科書を黒板に写す、生徒がそれをノートに写す、先生が練習問題を黒板に写す、生徒がそれをノートに写して解く、1時間の授業でも15分たつたら終わってしまうという授業をやっていました。やはり「解き方や考え方の説明は無いの」、とか間違つたら何故間違えたとかどうやって正しい答えを導きだすかっていう事ではなく、正しい答えを書いたら終わり、先生は終わつたら終わつたで後ろで本を読んでいて、生徒は怒られないようにおしゃべりをしているという実態でした。日本から来た先生としてできることは、わからなかつたらわかる解き方を教える、間違えてもいいからそこからどう学ぶか、「わからなくていい」と、「わからない事を教えるのが私たちの仕事だよ」といいました。あと自分らしい表現をしよう、時間いっぱい授業をする、というような事を気をつけてやりました。

自分らしい表現をするという事なんですけど、やはり小さいころから情操教育というものを受けていないので絵が書けないんですよ。写してっていうと何とかできたりするんですけど、すごくそれに自信がなくて合ってる間違ってるっていうのを気にしちゃって、でもこういう表現は自分らしくていいんだよとって、ちょっと書いたら「これすごいま

い！」という生徒も自信をつけて徐々にかかるようになりました。

生徒達の変化で、日本は比較的學校は休まないのが当たり前だと思うんですけど、南の國でありますので雨が降ったら休むし、ちょっと具合が悪かったら休むんですけど、學校が楽しいみたいで休まなくなりました。あとはすごく学びたい気持ちというのがあって宿題ちょうだい、とかもっとやりたい、とかっていう気持ちが出て自信をつけていったようです。あとは自分らしい表現もできるようになってきました。

先生達の変化としては私がやってくれるなら任せちゃおうということでお茶をしたり、おしゃべりをしたり自分の書類を作ったりで、やはりあまりいい変化は見られませんでした。向こうの先生達も技術は持っているんですけども、わかっていることはわかっているんですけどそれを生徒に伝える技術がないなというのが感想で、後半はそこをやって行こうかと思っていたんですけど、後半戦、校長先生が変わったら私の要請もコロッと変わって専門の体育を教えるようになって、私はそれはそれですごくうれしかったんですけど。

体育を教えるにあたってフィジーの子ども達にはどんな体力が必要かというのを考えまして、これは私が筑波大学体育専門学群で学んだこういう表などを元に、こんな感じでフィジーの子ども達に必要なのは持久力や柔軟性や、その時何をしなければならぬという判断力なのではないかという事で、それを育てられるような授業内容を作って行きました。

いろんな障害を持った子がいるんですけど、この風船のは真ん中の子が足が不自由なので座ってできる風船バレーをしてみたりとか、あとは英語ってスポーツも遊びも play なんですよね、日本と違ってそこが分けられてないところがあって、体育じゃなくて遊びになっちゃうところを、これは体育だからちゃんと授業の流れをつくって始めは集まりをしたら体操、ランニングメインのプログラムをやって、片づけという流れを作って行きました。いろんなグループでやる時間を作って、クラスでやる時間、グループで活動する時間、あとは全校でレクリエーション的にやる時間というのをやってやっていました。授業で徹底してやったことは「bring your change」と書いてあるんですが、「着替えをもって来い」と「ちゃんと着替えて授業をやろう、動ける格好でやろう」という事、あとは「making a line」日本だと授業の最初に列になるのは当たり前なんですけど全然並べないんですよ、並べないのが悪いとかっていうのじゃなくて、やはり全然それはならってないからできない事であって、まずは始め並ぼうっていつてそこから私が生徒の名前を呼んで、何故呼ぶかって行ったら日本でいう健康観察とかの意味もあると思うんですけど、呼んだ時にハイタッチをして、私はここが生徒一人一人が目立てる場面かなと思って、いろんな障害を持った子がいて車いすの子もいるけど、ハイタッチはできたというところでここを一つその子に焦点が行く場面を作ろうと思ってやってみました。こんな事を気にして後半の体育はやっていました。

こんな事を5カ月やっていたら「national game in Suba」っていうのがあるんですけど、フィジーというパラリンピックみたいのがあって、生徒達がすごく頑張ってくれてなんと38個のメダルを取ってくれて前年度は5個くらいだったんですけど、やはりやれば結果は出るんだなという事がわかりました。

こんな感じでみんな一人ひとりの写真を撮ってあげたんですけどすごくいい顔をして、見ていてくれた人に聞いても、去年と気持ちが違うよねって言って、一生懸命やる事がカッコいい事なんだよと伝えたかった事が伝えられたんじゃないかなと思える瞬間でした。

勝ちの原因というのは授業をつくることで基礎体力や姿勢が向上したという事と、適切なエントリーというのがあります。

あと頑張れという言葉を教えたんですけど頑張れというのは「fallen heart」とか「do your best」という言葉で、それを合言葉にして頑張れ頑張れって生徒達も応援してたんですけど、この大会に行く時に、リボンに自分の出場種目と頑張れって言葉を書いて一人ひとり結んで、ランタカ養護学校のきずなみたいな感じでみんなでこれをして大会に臨んだらいい結果を収めたという事でした。

地区大会では何とメダルを1個しかとれなくてこの差は何だといったらパラリンピックの方は「athletic」といって陸上競技がメインなんです、個人種目だと生徒達はすごくいい成績を収められるようになった。で地区大会はサッカーやネットボールやバレーボールってチームスポーツだったんですね。チームスポーツだと彼らはまだ自分だけじゃなくて、仲間と協力してというところまでは私の任期では育てる事が不十分であったという事で、今回後任が行っていますのでそっちに託したいと思います。

こういう感じで体育の授業をやって来たよというワークショップを先生たちにしたりしました。

メインの活動の総括としては生徒との関係や体育授業の基礎づくりとしては、自分でもやれるだけやったというのがいえると思います。でも授業に関する先生との協力という点では正直、なかなか連携が取れなかったという反省があります。

原因としては生徒達の今の時間を大切にできなかった、自分の先生という仕事への誇りをフィジーの先生にも求めてしまったというのがあります。

これがみんな悩む事だと思うんですけど、隊員と生徒の信頼関係を作るのは結構簡単だと思うんですよね。一生懸命やったら、変化は実感できると思います。でもやっぱり隊員がいなくなった後もその教育を持続してほしいと思うと、現地の教員に教えることが必要なんですけど、そこがなかなか、大人はなかなか変わらないんですよね。大人が変わらなくて、指導もなかなか変わらない、でもやはり隊員の任期も生徒の学校生活の時間も限られているというのが教育系の隊員にあるみんなの葛藤ではないかと思っています。あなたならどうしますか。行ったら絶対ぶつかると思うんですけど、私が出した選択肢としては、両方大切にしようといいながらも結構私は生徒よりになってしまったかなと思っています。

どう考えたかなという生徒達の今の時間を大切にすると、もしかしたらそれで生徒達が素敵な先生になってくれるかもしれないと、先生じゃなくても素晴らしいフィジー社会を作るために貢献してくれる人になってくれるかもしれないという、自分なりに理由づけをしてしまったのかもしれないんですけど、こういうところでとりあえず両方大切にしつつも最後の方は生徒達の時間を大切にしました。あとはうちの学校に限っていったら先生たちの定年が近かったので、ここに力をかけても将来つながらないんじゃないかなと思いました。あとは先生たちのアプローチも続けていくという事です。

これを見て「what you see?」どう見ますか、ってこれ最後の方なんですけどほぼみんなが着替えをもってきてるんですね、こういう状況になりました。これも同じで彼女、彼らが一応列になって走ろうとしていると、これは一応結果が出せたのではないかと思っています。あとここにいるこの先生が体育の先生なんですけどこんなよっかかっているんですけど、一応ちょっとやる気を出して指導をする気になってくれているというところで、完全ではないんですけどできたのかなと思っています。

あとは活動が終わって他のフィジー隊員との連携というところで「matsuri Japan festival」ということでフィジーのみんなに日本文化を紹介するイベントをしたりしました。あとこれはフィジーの腰に巻くスルというスカートのようなものなんですけど、このイベントで使ったグッズでこれはうちの学校に受注をさせてもらって、生徒と教員とか町の人とか校長先生とかみんなで一生涯懸命作ってくれて、こういうイベントで日本人が買ってこっちにお金を落としたという感じでした。あとは同じようなミニバンを自分の学校でもやりました。

日本の学校とのつながりというところでは通信、フィジーよりみんなへというのを出していました。あとはクロスロードというのがあるんですけど、日本の生徒への手紙という事で日本の生徒が私に手紙を書いてくれて、私が返事をするみたいな事も取り上げていただいたりしました。

あとはブログをやっていて日々の活動をネット上でみんなに見えるようにしていました。

これは最後に私の冒険なんですけど、フィジーのこれいちばん大きな島で、500キロあるんですけど道で通じているのでこれを歩こうと思って、これはJICA的には完全にアウトなんですけど、しがない公務員の最後の冒険という事で最後にこんな旅をして、日本の「田舎に泊まろう」みたいな感じで一日8時間40キロ弱を歩きながら、最後にフィジーをかみしめながらこんな感じで、ノーアポイントメントで泊まる場所とか全然決めずに行っただんですけど、わたしは都市にいたのでほんとのフィジーの地元の人たちに会えたというのがすごくいい経験になりました。こんな感じですよ。すごくきれいなんですよ。

こうやってボロボロになりながらもなんとか一周をして2週間かけてゴールをしました。こんなこともやっちゃいました。何のために歩くのかって思った時に自分で笑ってもしようがないので、100歩を5セントとして寄付をしようと思ってフィジードルで約300ドルぐらいにしてこっちにユニセフの方の支援制度があったので寄付をして、自分なりにこの旅を締めました。

これは私ってアメリカの協力隊と一緒に住んでいたんですけど、最初はやはり文化の違いで大変だったんですけど後半戦では仲良く二人で行きました。

帰国後、今なんですけど帰国と職場異動のダブルパンチで非常に厳しい日々を過ごしました。先生たちは目の前の仕事がやはり忙しいのでそんなに相手にはしてくれないです。協力隊行って来たの？という話さえもそんなに興味はないような気がしています。日本で必要な細かい配慮は完全に無理ってというのは自分でもすごく感じています。1学期はそれでいっぱいいっぱい、2学期になってやっと取り戻せたかなと感じています。やはり忙しいです。あつという間に1日13時間労働の復活が始まっています。

生徒に話してもわからないっていうのは、私は知的に障害がある、特に今は重い生徒のクラスにいるのでそれを話せる機会がないと。寒い、体が環境に不適應です。10月からこれで4回目の風邪をひいて完全に体調が悪いです。

あとは晴れていても日本の空は水色だ。こんな青空のもとにいたのがちょっと日本の空は足りないなと思っています。

でもいい事として本当に色々な価値観を認められるようになったなと思っています。あとは人間関係の広がりという事で、教員だけじゃなくて本当に全国各地にいろんな特徴、得意分野をもった仲間が広がりました。

あとは、世界や政治への興味、世界の平和の事とか、やはり目の前の仕事でそんなにアンテナを張ってはいなかったんですけど帰ってきてからはすごく気になりますね。

あとは政治への興味で、いま大分JICAが仕分けられていますけど、仕分けられちゃうと困るんですね。仕分けられちゃうとフィジーの町、私のいた学校に協力隊が送られなくなると、そこで待ってくれている子ども達がいるから。そういう意味でも政治への興味というのも出てきました。

あとは家族を大切にしようになったんじゃないかなと、2年間心配をかけ、2年間大目に見てくれた家族の事を、帰ってきたらやはり2年前より大切にしたいという気持ちも大きくなったし、実際にできているんじゃないかと思います。以上で終わります。ありがとうございました。

【質疑応答】

質問：お話ありがとうございました。家庭科の準備はされていたんですか

先生：教員免許は体育の教員なんですけど、自分で学べる範囲で訓練前と、フィジーに行ってから家政隊員でいった隊員もいたなのでその人に教わりながら自分なりにできる準備はしました。

質問：針と糸は？

先生：針と糸はさびたのがあって、後は自費で買ったりとか、JICAの方で活動支援経費という制度があってこういう事をしたいので、こういう予算をくださいという申請ができますのでそれがちゃんと理由の通っているものだったら予算が通るのでそれで買っていただいたりとか、あとミシンを購入していただいたりとか、その辺はJICAのサポートがあると思います。

質問：私は家政でいくんですが、現地でその場に応じた要請だったりとか臨機応変な対応をされていて、本当にできるのかなという不安が募ってきまして、日本でこういう事をした方が良かったという事があったら教えてください。

先生：多分協力隊に行こうという気持ちがある人だったらたいていの人は現地でも大丈夫だと思うんですけど、やはり行ってみないと要請もどう変わるかわからないし環境もわからないところがあるので、もう日本では日本の日々を楽しんで一生懸命やって、その一生懸命やった自信を持って任地国に行くのが一番じゃないかと思います。